大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）大正十四年一月十日印刷　大正十四年一月十五日發行

川柳雜誌

第二卷　第一號

川柳雜誌　第二卷第一號　（大正十四年一月十五日發行）

目次

萬年筆縱横……麻生路郎（二）
八瀨の牛……西原柳雨（八）
新年雜吟（句）……武笠山椒（三）
お醫者さま（句）……芦田美代子（三五）
俳風柳樽 初篇二篇の丁數順……岡田三面子（八）
冤罪……中井山美（八）
蕎麥で冷汗……高橋かほる（一〇）
初句會の夜の出來事……若林吐露坊（一五）
證據物件……西村山月（二四）
菠稜草の一句から……永尾宗斤（二）
自選三句抄……諸家（一六）
千代崎橋まで……關本雅幽（一九）
主幹と私……太田徹底郎（二六）
近作……麻生路郎（一）
川柳家失敗談
川柳塔……（四）
吉城山、雅幽、花童子、莢豆、美の作、助六、かほる、彩霞、史風、一洲、柳路、二柳子
本社忘年句會……橋本二柳子（二六）
川柳書架……（二六）
近作柳樽……麻生路郎選（一〇）
柳骨氏送別句會……太田一聲記（三七）
悟郎居小集……（二九）
特別募集句發表
旅人……龜井花童子選（二八）
弟……柳川洲馬選（二八）
松……竹田芦穂選（二九）
店先……高橋古城山選（二九）
金庫……吉川啞人選（三一）
牡蠣船……探崎松郎　神崎一閑子　共選（三二）
表紙畫……吉岡烏平
編輯後記……（三〇）

川柳雜誌

第二卷　第一號

近作

麻生路郎

花粉に塗みるゝ死が襲ひ來た

木の葉をくつつけ　戀をむさぼる

眼を配りながら刑事は消ねにけり

まあいいさ　まあいいさ　眠むる

待て　待て　待て　ミ白がいふ

一九二五、一、三

萬年筆縱横

麻生路郎

過去一年は私にとつて、いゝ意味の惡戰であり、苦鬪でもあつた。

◆

同人の多くは、微力な私を援けて、川柳雜誌の完成へと鞭韃をおしまなかつたが、ある同人は創立當時の熱を加速度で失つて、同人たるの責任さへも忘れたやうな顏をしてゐた。

◆

けれども私は、それ等の同人の行動に對して一々とがめだてをしなかつた。長い月日であると思つて、知つて知らぬ顏をしてゐた。

◆

ほんとに長い月日である。月給を貰つてゐる社員でさへも止めたい人は止めてしまふ世の中である。同人費まで出して面白くもない雜誌社に關係してゐるやうな物ずきな人もなからうから止める人に對しては萬止むを得ない事情のあるものとして承認した。

◆

同じく止めた人でも、止めたくはないけれども止めた人もあつたのである。私達は、何とかして、そんな人を引き止めやうとしたけれども、そんな人は單なる引止め方法では止めることは出來なかつた。それも止むを得ない世の中だと思つた。

◆

ところが秋になつて、私の健康が損はれた。それは自分として無理の出來るだけ無理をしたからであつた。しかし雜誌は續けて出して行かねばならなかつた。

◆

ある號の如きは私のからだを案じて、編輯に馴れない人達が寄つて編輯をしてくれた。そして、私が是非かかねばならぬ貞

だけをあけて置いてくれた。然し、その頁すら埋ることの出來ぬほど頭腦を痛めてゐたので柳友の私信をその頁に埋めて兎に角雜誌を出した。

◆

こころが、その私信の中に『群盲云々』の文字があつたので忽ち同人を退く人が出來た。その理由は『群盲の私は何のお役にも立たぬので同人を止めさして貰ひます』といふ事であつた

◆

私は微笑を禁じ得なかつた。その手紙を發表した時に、發信者のTは私のために心配してゐる旨の葉書を寄越したが、私の方にはさう群盲がゐることも信じてゐなかつたので、平氣で澄ましてゐたこころが自分で群盲だと名乘つて出た同人のあつたのには苦笑せざるを得なかつた。

◆

しかし私は驚かなかつた。いくら川柳雜誌だつて氷原のやうに一人一社でない以上は一盲位はゐるだらうぢやないかと思つた。殊にこの一盲は他社の煽動によつて尻をムズ〳〵させてゐたのであつたから、まことに云ひがゝりに好都合な時だつたのである。私信の筆者Tに對してひそかに感謝してゐるかも知れないと思ふ。T君たるもの案じなくてもよろしい。

◆

私はある機會の來るまで、こゝ以上は書かないが、兎に角變な煽動をして見れる人達にも困つたものだと思つてゐる。私は今健康を害してゐるが、私に健康が戻つて來たら其處には私の無遠慮な筆がどんな方面へ飛ぶかも知れないから今からおことはり申しておきます。

◆

右に述べたやうな不愉快な話は、さうたんとあるのではないから私の社は決してぐらつきはしない。私の微力を援けて何から何まで片づけてくれる同人があることも知つてゐて貰ひたい兎に角私の健康がも少し戻つて來さへすれば申分はないのだ。

◆

殊に同人二柳子は社のために目覺ましい活躍をしてくれた。もし私が社の爲めに幾分の責任を果たし得たとすれば、その過半は二柳子の功だといふことが出來る。彼は社用で鳴尾に出社すること昨一箇年間に百〇五回の多きに及んでゐる。社以外の箇所で私と面接したこと實に四十回、誰いふとなく彼に支配人の名を以てしたのも過言ではあるまい。他社の狀態を兎角癪に病んで面白がつてゐる人達の多い柳界へ我社には斯うした堅實な人物のあることを知らしておく。

◆

川柳雜誌はだん〳〵い、雜誌になるだらうと思つてゐるが、愛讀者や寄稿家諸氏も出來るだけい、雜誌にするやうにお骨折りが願ひたい。

川柳塔

◇　高橋古城山

母からの手紙が屆くこの寒さ

梅蘭芳胡弓と同じ聲で泣き

うつかりと上つて子猫尺に逃ひ

嫁さんを貰ふ話を馴染知り

考へもつかず時雨るゝ窓を閉ぢ

戀をもう諦めたのか落椿

臺所また咕の聲になり

出格子へもたれて見るも戀にして

柔道を話し舞妓に嫌はれる

母親の溜息長男首を上げ

◇　關本雅蹴

彼奴こんなとこへ行つてる年賀狀

譽めて居てちつとも喰べて呉れぬなり

好きやんの枕は別に出して來る
百姓も今更出來ず見る手筋
武裝して短い夏を甲蟲
あくまでも何んでも書いて讀ませるぞ
儲けたらアルプス越へて歸りまず
眞白な雪降る鄕で汚れて來
狂人と呼ばれる人氣持つて居り
空想はたくましく尻落ちつかず

◇　龜井花童子

値の高い羽子板今日も賣れ殘り
門松の骨だけ出來て吹雪かれる
耳朶を赤くしてゐる初奉公
ごう氣が向いたのか鰥亞鈴
貯金した事を云はない次男なり
おいそれとゆかなぬ大工の鉋なり
二三臺待つてゐました告知板
朝からの客に女房氣を利かし

◇　黑木莢豆

二階借り雀の聲を近くきき
はづかしいせいかもしれぬことであり
表情の變化をみせてきりまはし
無口なのほつほつぢらす味を知り
母親の顏を思はす日が續き
電車では現狀維持の眼が動き
きつちりと着しにやけてる紺飛白

◇　駒井美の作

窮屈な帶で藪入たんと喰べ
鏡臺を女蚊細い息で拭き
醉つている壯士に署長如才なし
紋付を脫げば器用な隱し藝

切れる文義理と云ふ字がにじんで居
土間の下駄電燈伸すだけ伸し
外科室へ平蜘蛛で來る示談金

◇　松本助六

人里を放れ六部は錢を讀み
アスファルト馬の力が餘つて居
植木屋も旦那と共に年を老り
松の内たたみのよごれ目立つ事
合服もやつと揃ふて首になり
落ち附いて見れば何でもない事件
國の母丁稚は客と間違へる

◇　高橋かほる

上蒲團の柄又かはる戀病
妾宅の今日珍らしひニ調也
桐炭がパチ〳〵はぜる歌がるた
彈初めに母面白くひぢをなめ
ゲートルの白いのも居る土方也

◇　武田彩霞

鑿の先其の鑿の先に打め込めて
商賣で罪と思へど又欺し
まだそこに居るやうに思ふ二三日
雪國の夜を思はす蜜柑の香
飛ひ付くを待つてるやうに柳垂れ
家族風呂名殘を惜むやうに出る

◇　原史風

暮れかゝる海に二三度ペンを置き
支配人居りますと言ふ金庫なり
失戀の目に別莊のつまらなさ
次郎長を讀み〳〵一人酒をつぎ

ストーブへ女給の方が足をあげ

◇　宮内一洲

丸火鉢抱いて矢鱈に氣がくさり
親類の中に男を一ッ出し

◇　岩崎柳路

指胼胝を女房に見せる代書人
寢顏まで世帶染みてる女房なり
玉葱の芽が延びて居る流し元
露骨なここで交代をする春團治
麗かさ下女物干で籠の鳥
カンバスへ木の葉が散るも野外にて
雀もうシグナルの音に馴れ切つて
驛長の姿もチラと通過驛
小澤山バリカンを買う氣にもなり

◇　橋本二柳子

街灯をはつきりと見る雪が降り
淋しさを增す物干場笛をきゝ
隣の子いなすに菓子を持たすなり
病室へ機械の音がせまつて來
佛の世界へ行くのだときかされる
提灯を差上げるのが最後なり
料理屋へ巡査もついー這入るなり
煩冠りされと巡査に叱られる
そう言へばわかると丁稚きいて去ぬ
玄關に寒うに待つてる手内職
心配もなく鐵瓶の湯がたぎり
紺絣女中にまでも禮を云ひ
窓口へ女の顏が角に見え

誹風柳樽 初篇二篇の 丁數順序

岡田三面子

誹風柳樽の同じ篇を、幾册も集めて比較して見ると、誰しも其丁數の順序卽ち句の順序の、一致して居ないのが澤山あることに氣が附く。初篇と二篇とは其最も甚だしいもので、ざうかして正しい順序を切りたいと、長らく心掛て居たところ、大正十二年五月廿九日、私の第五十六次の誕辰の日に、神田の辰巳で偶然手に入れた初篇は、紙質も刷方も奥附も、特に綴ぢ糸も、確かに最初の儘に相違ないから、恐らくそれが正しい順序であらうと思つて居た。然るに『川柳雜誌』へ何か寄稿せよと云はれて之を披露しようと本日既に二枚ほど書いてから、成るべく手を附けまいと、今日まで大事にして居た綴ち糸を切つて、咽喉の所を見たらば實に實に實に、愉快で堪まらぬことが起つた。其本には判然、丁數の刻が存じて

寃罪

（川柳家失敗談）

神戸　中井山美

私の初奉公の當時良吉（店名）時代毎日〳〵身體より大きい程な荷物を背負つてK吉さんの後から御得意廻りに出てゐた其のK吉さんこそ、私に親しみのある人であり、苦手でもあつた。何故なれば御機嫌麗しき時は御得意廻りが活動小屋にと半日を過したり、又しるこ屋なぞで甘い汁も吸はして貰つたもんだが、賣行不振とでも來たら、あの怖い顔を一層險惡にして荷物をうんと、こさへ一日中引張り廻された。此の怖い顔したK吉さん御得意での動作と聲は格別の物で猫撫で聲其のまゝで『有難度う御座います』『畏まりました』と平身低頭で始終やつたので御得意受けも良く、從順しいとの定評だつた。或る日山手の御得意へ行つた時の出來事であつた。

嚴かめしい硝子格子を開けると何時も吠ゆる犬が頭を、もたげただけで、うず

居た。『川柳雜誌』への寄稿を思ひ立たなかつたならば、單に正しい順序と思ふだけで過ごしたであらうが、今日初めて、それが正しい順序であることを斷言することが出來るやうになつた。毎丁の初句を擧げて左にそれを示します。これと違つて居るのは盡く正しくないのです。

初篇

一 序
二 五番目は同じ作でも江戸生れ
三 鞠場から立派な姿でひだるかり
四 饅頭に成るは作者も知らぬ智惠
五 三神は嬲るとよみし御姿
六 紅葉見の鬼に成らねば歸られず
七 橙は年德さまの痴氣所
八 傀儡師十里ほど來た立ち姿

寶曆十一己年萬句合原句

傀儡師八九里も來た顏つ付
九 上下で歸る大工は取卷かれ
一〇 正直にすりや橙は乳母へ行き
一一 闕寺で勅使を見ると犬が吠へ
一二 お賓頭盧地獄の短氣笑つて居
一三 駕賃を遣つて女房はツンとする
一四 踊り子の隱し藝までして歸り
一五 四辻へ來ると追人の氣が殖ゐる
一六 關取の後ろに闇い廉按取
一七 金の番トロ〳〵でしてうなされる
一八 道問へは一度に動く田植笠
一九 能い娘作貢濟まして旅へ立ち
二〇 清水を費へな錢にたとへられ
二一 化かされた天窓ですくに奉加帳
二二 珍しい神の名を賣る宮雀
二三 枕繪を持つて巨燵を追出され

寬政改革後此と挿換へた句

輕石を一つとぢつて義を立てる
二四 きの字屋は階子の口で人拂ひ
二五 下駄下けて通る大屋の枕元
二六 下戸の禮者に消炭をぶんまける
二七 日の暮に高繩の戸を惜しく閉て
二八 夜蕎麥切振るへた聲の人だかり
二九 夜蕎麥切立聞きをして三聲呼び
三〇 饅買つて餘所の流しへ持て行き

くまつてゐる。二間向ふに何時もの樣に三人の女中さんが裁縫に餘念がない。一人が用を聞いて呉れて奥へ立つた。後は靜寂其のものである。只時計のセコンドを刻む音だけが聞ゐる。此の時意外も意外轟然一發K吉さんの方から鳴りが上つた。女中さん達はクス〳〵と縫物の上に俯伏て笑ひ出した。私は吹き出しながら御本人はと見ると黑赤うになつて私を睨んでゐる。一層の可笑しさに笑ひを大きくした時突如り『行儀が惡い』と大聲し平手で嬢と言ふ程頬べたを張つた。私は何が何だかさつぱり解らない。只忙然としてゐる間にK吉さんは小さい包の方を抱へて表へ飛出した。女中さんの方は相變らず笑ひ崩れてゐる。サア大變放屁の罪は歴然私におわせられたも同ぢだ。驚いてK吉さんの跡を出ようとしたが戸が敷居に喰ひ違つて困つてゐる間に、今まで默つてゐた犬がワン〳〵吠ゐ出し一牛懸命虚口を脫した思ひで表へ飛び出し

三一　伸をする手に腰元はツィと逃げ
三二　松右衛門二言こいはず酒を受け
三三　除の哥人家の内儀持ち歩き
三四　長噺鯖鮨の留まる鑓の先
三五　女房は醉はせた人をにぢに行き
三六　催促も停屋のするはゆるがしい
三七　江戸を出て姿の出來る拔け參
三八　うつちやつて看板にする紫屋
三九　髭拔の鏡に娘氣を減らし
四〇　持參金疱瘡徐けの守りにし
四一　はたけから洗足程の日を餘し
四二　大磯に弓箭筋の地藏あり
四三　一トさかり身に成る顏へ遠ざかり

尙ついでに一言する。初篇には寬政改革に因つて挿換へられたのが、前掲二三丁枕繪云々の外、左の三句、合計四句あ る。

六才
元　役人の子は握々を能く覺ゑ
換　メッカチは大事旨はむごくする
二三才
元　母の手を握つて巨燵仕舞はれる
換　法眼のすゝめて四本木を植ゑる
四〇才
元　坪皿へ紙こハよほど學が長け
換　哥かるた下女股倉へ取りためる

さて二篇は如何こ云ふに、所藏五册のうち四册は丁數が無い。それで長い間、二編も初篇同樣其正しい順序を知りたいこ思つて居た所、大正十二年二月二十八日、神保町の村口から買入れたのこ、以前より藏して居て、咽喉に丁數の刻の幾分殘れるのこ、ピタリこ一致して居る。卽ち左の順序が正しいに相違ない。

一ウ雪打の加勢に乳母の牛手わざ
二　狐火の折々野路を綻ろばし
三　長局何ンたる願で納め太刀
四　巨燵にて毛雪踏み履く面白さ
五　髮を結ふ時に女は目がすわり
六　抱いた子に叩かせて見る惚れた人
七　口上を下女は尻から搖すり出し
八　聟の癖妹が先きへ見附け出し
九　管笠の内へ帶解く眞菰刈り

た時向ふの辻ではK吉さんが、あべこべで大聲上げて笑つてゐた。

それから後、忠實に廻つてゐたK吉さんも此の家だけは一切廻らなかつた。今はK吉さん故人こなつたがさぞ地下でくさめをしてゐる事であらう。

蕎麥で冷汗（川柳家失敗談）

大阪　高橋かほる

何だか私も書いて見たくなりましたが併し此しくぢりはまだ私が川柳が作れず川柳つて面白いもんやなア……こ思つた時の事ですから川柳家失敗談こ云つても宜いでせうか知ら……忘れもしません葛城銀行の（目下三十四銀行こ云ふ）春季運動會が奈良の公會堂で催されました折の事です。初めてのセイか彼の公會堂の庭を隨分廣く見受けました。其庭に張ボテの達磨が大中小この三個かなり大きな物をこさへて有ります其達磨の口へ玉を放り込むんですが幾ねらいを定めても大中小共一個も玉が入りません…傍

一〇 こつさまと寢る髪置は痩せつぽち
一一 四斗樽へ珠數の切れたを溜て見せ
一二 乳母殿を貸しなと云へば赤ンベイ
一三 江戸町へ戻れば初手の顔は無し
一四 大工わろ左官に帶を締めてやり
一五 猿廻し子はやつかんで跡を追ひ
一六 色事に羽根の生へたる清水寺
一七 流行目の一側ならぶ呉服店
一八 雞は何さ〳〵で貰はれる
一九 深川の文には二文添えてやり
二〇 つみ髪の前やくらしい美しさ
二一 居なりかと雛の使に聞かれけり
二二 女房が死ぬと夫トは文を遣り
二三 切張りも袴てするときつと下卑
二四 旅立は二度目のさらば笠でする
二五 料理人堀に居るうち鳴らして見
二六 樽賣一本出して振りを附け
二七 辻番へ明くる日反吐の禮に行き
二八 惡り人寢言に云ふが本の事
二九 孝行に持つ女房は年が長け
三〇 母親は百度參りの立番し
三一 打出しの頃淡雪は葛を練り
三二 底意地の惡いも見ゐる六歌仙
三三 皮癬まで二人り禿は對にかき
三四 搗米屋女を見ると強く踏み
三五 用の無い鰐口叩く護符取り
三六 吉原は大阪ばかり他人にし
三七 不機嫌な客船宿の戸を叩き
三八 新酒屋さしで二階をおつぶさぎ
三九 藥箱向ふの眞田取つてやり
四〇 手間取つた髪を姑めじろ〳〵見
四一 番船は風の手枘ぞ猿田彦
四二 籤入の迎ひの傘の一トからげ

以上（大正十三年十二月五日）

第六支部 新年句會

日時 一月廿五日午後一時
場所 六甲苦樂園長春樓
兼題 「戎」五句 駒井美の作選
會費 金貳拾錢

には顔の知つた仲居が居て『ヨーヨー高橋さん〳〵』……それが濟むと次は名物食物競走といふので札を貰つて庭園内の急仕立ての名物屋めぐりをするんですが十三のやき餅も、何こかの、みたらしもたこ梅のかんこう煮も早や賣切で殘るは更科のそばだけです……さア困りました實は私其日までそばの味を知りませんでしたので食べて見たくなり腰を下し。いざ食べようとしてそばのだしを皆そばへ振りかけて終つてそばの器を手にしますとだしは食卓の白い布に溜つて、ポタリ〳〵雫がたれてますのでチョッ此入物は洩るんだと舌打ちをしたくらひそばの食べ方はそれで宜いんだと思つてますとそば係の赤だすき赤剃だれの仲居が私の肩を輕く打つて『一寸高橋さん今日は何ないしてなはんね…ばんまに頼んまつせ…』と云はれ『わてまだ醉ふてエへんのんに何んでやろ…』と巧く云ひつくろひましたが…そばのだしをそばへ振りかけて食べようなんて今思ひ出しますと脇の下から冷汗が出ます。

菠薐草の一句から

永尾宋斤

『川柳雜誌』第一卷第十一號の路郎氏の卷頭柳吟中に

君見たまへ菠薐艸が伸びてゐる

と云ふのがあつた。自分はこの川柳を暫く凝〻と見つめてゐた。川柳は人事詩である。これまでの川柳はさうであつた。人間と人間との間に起る出來事、それの感情、それの川柳的觀察、これが川柳の歴史的、傳統的傾向の本道である。そして滑稽、諷刺、皮肉、等々、川柳は人間生活の側面觀又は裏面觀が全部であつたやうに自分は思つてゐる。

所が、最近の川柳に對する自分の受入れは、どうやら生活の直面觀になつて來たやうである。元より自分は川柳には全然門外漢ではあるが、門外漢としては比較的この頃の川柳を讀んでゐる、その機會の多いものである。當つてゐるか否かは別として『生活に直面して來た川柳』と一概にさう思つてゐる。

無禮な言ひ方だが、川柳はまだ〳〵興味中心からのものである。其處に川柳としての面白さはあつた。川柳が興味の面白さをつまらぬとして、思想的に深入りして來る、生活に直面して來ると云ふ一面は、近頃はそのやうなこともあると思ふ。これ元より創作としての川柳の向上である、然し在來の川柳の味と云ふものは脱けて來ることも考へねばならぬ。脱けても好い、川柳は斯く時代と共に進轉するのだと云ふ事も作家としての意氣である。その意氣のところ、川柳はおそろしく眞面目になつた若し間違つた、所謂これまでの穿ち、輕口的の川柳ばかしか知らぬ人が見たなら、餘りの變りやうに或は川柳としては認めぬほどであるかも知れぬものがある。

偖て、この句『君見たまへ……』の川柳に就て又考へる。萬葉集以來の我國の和歌が上下盡くの日本人の詩であり言葉で

あつたものが、鎌倉時代になつて、いよ〳〵武士と云ふ戰爭專門業者が出來て、それが政治面の覇を握り、社會の表面に權を振つて來て、それ以來世の中が槍や刀で騷々しくなると、殊に足利時代になると、文學和歌は國民全體のものではなくなつて中間の武士階級が遮斷機を下ろして、それ以上の上流者間へのみ多く風流韻事が行つて仕舞つた。僧侶の間のみに行はれた文學の五山時代もあつた。

文學を上流社會に奪ひ去られた町人百姓は、それに一部の武子も交ぜつて、內面生活の心淋しさから、何かこれに換るものを得ねばならぬ其處で最も手近な落手的な短いものが一部から起つた。これを直ちに詩と云ふことは出來ぬが、その叙法表現には和歌の形式の流れたもの、切り崩したもの、半端なものもあつたとして置く。然も永年の傳統は、やはり在來の和歌趣味に染まつてゐる人々の所謂歌心は、先づ民間へ和歌體の引き下げ運動を自然の間に試みてゐることであつた。

元來、貴族間のものを町人百姓の輩が眞似やうとすること、其處に自ら產まれるのは身分柄でないと云ふ滑稽である。その滑稽を自覺する時に、更にその作品は滑稽味を內部に持ち表面に現はして來る、新なる詩の創作は常に傳統的のものゝ改良であつて、然して出發は滑稽からであつた。卽ち和歌のむつかしい規則から、自由と興味とを持つた連歌が生れ、又俳諧體連歌が生れた。それから又俳諧が生れ、俳諧の最初の第一句卽ち發句が獨立して、今日の俳句の前名である發句が生れた。發句から川柳が生れた。生れたと云ふよりは別れた。と云ひたいのは、一世川柳が持つてゐたやうな滑稽は元より德川時代後期の所產物ではあるが、これを歷史的に見てその傳統は和歌を俗間に引き下げた當時の滑稽の底流れであり、それの時代變遷である。故に滑稽としての川柳は俳諧發句の中にも交せつては居たが、滑稽そのものは俳句以前のものからの直流であると一面から云ひ得られると思ふのである。

俳句も之より最初の源泉は滑稽味であつた。社會の事象を約束の文字に綴ると云ふ興味的本位であつた。俳諧の祖とも云はれる宗鑑は、下俗によく云へば普及的に守武は上品なる滑稽で二者の連歌師先づ俳諧發句の水先案內をした。

切りたくもあり切りたくもなし

の附句を宗鑑は

盗をとらへて見れば我子なり

と付けてゐる。發句

花よりも團子と誰かいはつゝじ

摺小木に知らすな蓼の花ざかり

等である。守武の方は

こほらねど水ひきとつる懷紙哉

と位が滑稽で

落花枝にかへると見れば胡蝶哉

元朝や神代の事も思はる、

なぎ伊勢の神官としての職掌の上品なものもある。が、その文字の上の遊び、滑稽は古風の貞德に流れ

霞さへまだらに立や寅の年

鳳凰も出てよのぞけき酉の歳

なぎになり、意味合ひの滑稽は、談林風の宗因に發して

新春の御慶は古き言葉哉

鴨の足は流れもあへぬ紅葉哉

等てあるが

寄れ組まん兩馬が間に磯清水

新　樹

先生の夏一二本にて足ぬべし

なぎになると、大分に川柳味の先驅をしてゐるここではなかろうか。

一概にも云へぬが、その他にも種々の淵源的理由が元よりあるが、川柳とこの西山宗因一派の所謂芭蕉以外の談林風俳諧とは内面に於て可なり深い關係がありはしないかと思ふのである兎も角もさう云つた俳諧及び發句が、元祿時代に變つて、世の中の華美果然の反動的に、がらりと變つて一口に云へば淋しいものになつた

うき我をさびしからせよ閑古鳥

枯れ枝に烏のとまりけり秋の暮

なぎ將に後句は芭蕉が自己の前途を見付たと云はれてゐるもので、句は漢詩の寒鴉枯木に過きぬが、舊前の興味的滑稽とは内面に於て大なる相違ひある。同時代に於て、鬼貫は又『まことの外に俳諧なし』と看破してゐる。

先づこの二者を中心として、俳句は一大革命が起た。芭蕉は靜寂を詠ひ、細味をよろこんだに對し鬼貫は人生のまことは自然のまことであると今の言葉で云へばそんな事に氣が付いた。

要するに俳句は、この時に於て、興味本位から覺めて、人間だけの出來事からひろけて、文字の遊びを止めて、大自然を見きめて來たのであ。そして祖先傳來の滑稽は先づ本流ではなくなつた。此處に俳句として新樹立がある。併し取りのけられたかのやうな滑稽も、實は俳句が盛大になると共に中々廢りはしない。芭蕉沒後の其角は、江戸座風を開創した。これまた川柳にもなつて行く一先達である。

夕涼みよくぞ男にうまれける

十五から酒をのみ出てけふの月

等、江戸ッ子肌の人事にも委曲を盡さうとして來た。が併し、俳體のそれは明かに自然に對する人間の言葉の詩となつて進んだ。それ以來消長があり傾向があり、流派もあつたが、今日と

なつた俳句、自分等の俳句はこれで終始してゐる。自然を見つめる人間の心である。自然と云ふのは野山の景色をのみ云ふのではない。人間をはじめ總てのものに惠を垂れて與れる自然の力である。その現れの一つの花も雪も景色も枯れ艸も、自分等は親しんで行くのである。人事を談ずることも人事そのものだけに意味せず、自然のうちの人事であることに自覺を持つてゐる。自然と人生との溶け合つたもの、其處に俳句がある。人事に俳句はあるが、自然を度外したる作句觀念に於て俳句は失せて行くのである。此處に俳句に季感があり、その選擇に季題か生れてゐるのである。

漸く目的のほうれん草の方へ話が向ひて來たが、まだ少し迂回して行く。

川柳はその形式に於ては、前句附より出たものである。前句附は俳諧の附合せより一轉したものである、發句が俳諧の發句より獨立したやうに、川柳は前句附より獨立して附句のみにて意味を持つことになつたのである。發句はその意味を後の脇句その他へ傳へることを中止した獨立であつて、川柳は前句から受けて來る意味を謝絶した獨立であると思ふ。

内容の其の獨立は、發句かやがて自然を意義として行くに對して、川柳は人事專問の風俗詩の傾向に進んだのである。そして發句か得意としない滑稽方面に增長した。その雄なるものに湖十、雲皷などがあつたが、まだ川柳とは云はない即ち柄井八右衛門出で、川柳點の稱を世に喧傳させたが、然も猶俳風狂句と云つた。猶又明和二年の俳風柳樽初篇の刊行を見たのは實は興味ある前句附の附句から意味明瞭獨立の出來るものを輯めたものであると聞いてゐる。

兎も角も川柳は季題の季を認めず事件と事件よりの感情に獨立した人情詩であつた。自然を詠ずる事はあつてもそれを發句の如く季感を尊重しない、俳句と川柳との大きな一つの違ひはこの季感有無の問題である。俳句に於ける季は自然の表象である。

今日の川柳は、元より昔の狂句の類ではない。單なる人事の滑稽のみでは飽き足らぬことに進んでゐる。人事は元より自然もありがたく見て行く、其處に藝術は國境のない事の左樣である。

『君見たまへ菠稜草が伸びてゐる』は確に自然の大きな力を人間の路郎氏がしみ〴〵ながめてゐる。この自然に對する驚異は既に在來の川柳ではない。多分鳴尾の路郎氏の裏庭の畑にほうれん艸が莖赤く、たくましい生ひ立ちを持つてズン〳〵伸びて來た。艸の命、自然の微妙なるうごきの發見である。

であると思ふ。

これを直に俳句の領分だと云ふが如き横暴なことは云ひ得なこれを直に俳句の領分だと云ふが如き横暴なことは云ひ得な

（四〇頁へ續く）

自選三句抄

（到着順）

北京から來て葭町の色を見せ　（梅蘭芳）　阪井久良岐
宵はまだ淺いか湯女の話聲　（帝展長秋の淺宵）　同
一日でも愚痴のない世界に住度い　（賦懷）　同
いたづらな白紙へ何か書く　（破戒）　安川久流美
消印がはつきりとして足がつき　（運命）　同
爪揚子錐の代りのやわらかさ　（浮薄）　同
交番を三歩の距離に巡査立ち　伊東夜叉郎
貸さぬ奴親身のやうな意見をし　同
溝へ蓰のすてやうがある　同
物指しに早寢の亭主捕へられ　石井省二
澁柿へ大屋夫婦は譯をつけ　同
灘萬で無駄口きけば皿が殖ね　同
名人は教へて呉れず飲んでゐる　淺井五葉
今日は葬を送りましてなこ女將　同
利いた山葵に出來ぬお返事　同

抱いて來た本のぬくみと別れ得ず　白石維想樓
氣まづさを待つてるやうな膳につき　同
倦怠の續きを持つて朝が來る　同
反物で見る紋附は房がつき　本田溪花坊
默つてやがれてなこさのもの別れ　同
ひさつもつ心配判をついたこさ　同
三越をうしろに今日も土を堀り　吉本寛汀
つくづくさわが肉を見る晝の風呂　同
飛乘りをすれば辨當箱が鳴り　同
足袋を氣にしながら出たる十二月　齋藤松窓
もう一度座つて貰ふ髮の出來　同
禮裝で出て元日の霜をふみ　同
三輪車こき使はれて剝げてゐる　相元紋太
すき燒の湯氣しんしんさ灯に屆き　同
突き放す樣なものさ憫れがり　同
糸切齒カッンさせて正午になり　大島濤明
じれつたい心糸屑揉みつぶし　同
或時は牛猛然さ驅けて見る　同

八瀬の牛

西原柳雨

本年の干支に因んで大原女の牛を咏みたる古句十匹あまりを引出して見たのであり升が、御承知の通り手甲脚半の出立甲斐々々しく、天窓の上に大きな笊を載つけた大原女が三々五々と洛中を練り歩く姿は古雅優趣眞に京都氣分をそそるに充分であるが、古い畫なぎを見れば皆牛を牽き、又天窓の上には黒木と丈餘に切りたる木を蒸燒にした炭と薪この中間物見たやうなものを乘つけて居る。されば八瀬大原女とも云へば又黒木賣とも稱へられたものゞ

大原女はつむりで牛の脊を助け（文化）

は夫を云つた句である。

天窓から拔いてやさしく牛を打ち（文化）

大原女のやさしくじれる不てつぱら（文政）

ちと早う歩るさやいのと牛を追ひ（安永）

八瀬大原奇麗に牛を叱るこゝ（天明）

エヽこん畜生ほと〳〵せずにさつ〳〵と歩きあがれと竹の根鞭で尻をピシリ〳〵と打ちのめす關東べいの荒つぽいのに似ず、何をこぼ〳〵するのじやこのふてつぱらめもちつと早う歩きやいのうと撫でるやうに黒木で尻を檪られては牛も羞痒くてたまらず遲々として愈々埒が明かぬであらう。ふてつぱらとは上方にて牛や馬を叱る聲である。

牛の背を分けて大原の夏の雨（文政）

夕立は馬の背を分けると云ふ俚諺を捩つた迄の細工である。

中十日馬にしたがる黒木賣（明和）

十月中旬の最短日だけは牛を馬に乘換ねたがるとは尤もなことである。

一月に七日黒木を馬で賣り（文政）

黒木賣とて女である以上三月に七日丈けは牛ではなく馬に乘つて出るのは當り前で別に不思議はあるまい。馬に乘るとは馬の腹帶のやうなものを締むることにて月經の義であること柳家周知の通りである。

八瀬の嫁牛の機嫌もとりならひ（天保）

牽牛と織女を兼ねる八瀬の嫁（天保）

とある通り單にお姑樣の御機嫌を取るばかりでは濟まず牛の御前の鼻息をも伺はねばならず、夫而已ならず晝は犬飼星よろしくの體で牛を牽き夜は七夕樣然として機も織らねば成らぬとは八瀬の嫁たるもの八方多事と云ふべしである。

江口の見得で牛の背に八瀬の嫁（天保）

戻りには象ではなく牛の背に乘りゆら〳〵と加茂の畔を辿り行くさま曾我廼家式普賢菩薩の形がある。若し其姿を江戸の彌次喜太が見たら、江口の太夫出來た〳〵、イヨ濱村屋アなどゝ屹度冷かしたであらう。

黑木賢なぶれば牛を一つぶち（天明）

蹴ぶられては流石に京の在所の片ほとりに優しく育つた賤の女だけに西山に入る夕日に横顏を照らされながら牛の尻をうち〳〵家路をさして急いだであらう。

牛の脊で鳴いてる八瀨のきりぐ〳〵す（文政）

『虫の音をいたゝいて聞く黑木賢（文化）』と同想の趣向である。是でもうおしまひ。

千代崎橋まで

關本雅幽

師走の風に吹き込まれたように小倉厚司の中古を着た四十五六の男、松屋町から電車に飛乘つたが掛る餘地がなく運轉手の後に懷手したまゝ座り込んで目を閉ぢ酒臭い呼吸をして考へ込んでゐた。やゝあつて車中の目は皆彼れに集められた。彼れは次のやうなことを云ひだした『私は酒を飲んでます今日始めて飲んだのじやありません。月に二三回位のみます。嘘は言ひません、嘘を言ふと親方が使ふて呉れません、親方に聞いて下さい、月給三十五圓です。半勘定十七圓五十錢です、それで二三日休むと二三圓引かれます、貯金も引かれます。殘りを今日貰つたのです。五十錢で散髪をして男前になつた』と顏をなで乍ら『今晩二三合程飲みました。これから松島へ行きます。嬶買はしません。うろ〳〵と歩いて又二三合飲んで歸ります。私は今こゝに』と暫らく考へて『十五圓持つてゐます。確かに持つてます。切符下さいよ〳〵』と呼んで七錢で片道を買ひ『私は電車や汽車で遠くへ行くのが好きです』といふ。傍らに居た男席を開けてやり『汽車に乘つて北海道にでも行つたらどうです』『そんな遠くへよう行きません。私はもう四十七ですもの。三年したら五十です。もう十年よう生きません。うまい酒を飲まなけりや損です。着物はよう買ひません。私は菓子屋の職人です。いつもこんな裝りです。死んだら親方が葬式をして遣るとこと言ふて呉れます。嘘は言ひません嘘と思ふものは親方の所へ行きましよう』暫し考へ込んで居たが懷から新聞紙の包みを出して酒の肴の殘りとつぶやき乍ら鯨の皮を頬張りながら目をつぶつてしまつた。そして『嗚呼一つぺんゝ着物を着て見たいなあ……』と想ひに沈んだやうであつたが『千代崎橋〳〵』と呼ぶ車掌の聲に案外にも彼は飛立つように『千代崎橋ですか』と言つて立ちあがつたが急しい十一月の節期の人込の中へ彼は財布を握つて居るのか懷手のまゝ吸込まれてしまつた。

近作柳樽

路郎選

肩掛へ今夜云ひたい事を入れ　同　同
滿足な顏に變つた御散會　同　同
ちゝはゝにまだ打明けぬ酒の味　同　同
いゝ嫁が來さうに思ひ歸り來し　同　同
冬と云ふもの首卷に包んで　同　同
わしのやうなも少なからう愚痴になり　同　同
醉ざめと云へる淋しい顏を見せ　同　同
忘れてゐた友と逢ふて知る年かな　同　同
食ひかねた思ひ出もあり差向ひ　同　同
もうお嫁いやとは云はぬ樣になり　同　同

豐中馬行

かき分ける人振向くと巡査也　同　同
二三臺停めて車掌の口が過ぎ　同　同
伯爵を返し映畫の人となり　同　同
双六へ二人がゝりで父を連れ　同　同
美しいのがいゝ事にみんなきめ　同　同
ごの窓も人が住んでるビルヂング　同　同
平凡がいゝよ〳〵と伯父は云ふ　同　同
あの人好きよにおごろく父と母　同　同
芳紀正に五十に近い藝者にて　和歌山　久樂
男とは話もさせぬつもりなり　同　同

轉任の當座下宿屋から通ひ　同　同
草履はいて迎ひに來てる小さい驛　同　同
喧嘩する樣に市場で物を買ひ　同　同
口入屋判事の樣に聞き正し　同　同
玄關へ煮たきの匂ふ程の家　同　同
金持ちの大玄關へ鶴が來て　同　同
遠い山いつまで汽車の窓に見ね　同　同
優勝旗驛についたといふ騒ぎ　同　同
歪む程襖を明ける御立腹　同　同
結納の顏をも一度改める　同　同
眠られぬ晩の炬燵の暑いこと　同　同
校正を持つて博士の家を訪ひ　同　同
拗ね樣の大きなものは置手紙　同　同
行末を思ひ出す程閑なこと　同　同
相當の家柄らしい上女中　仁川論笑
妹が遊びに來ると手傳はせ　同　同
女湯で泣く兒をみながほめてやり　同　同
夜の雨行くあたり丈け降る樣に　同　同
ごう見ても俺を見て居る寫眞なり　同　同
猛火より二人となつてあらわれる　同　同
女客主靜に靴をぬぎ　同　同

女關におそれて犬に又おそれ　同　同
流連へ隣の部屋が泣きに來る　同　同
子を連れて思ひ出せない人にあひ　同　同
コオモリ屋張替る程荷を持たず　同　同
利廻りが何のかんのと百の金　同　同
お連れかと聞いて表へ聲をかけ　同　同
保險屋を連れて來たのは知つた顏　同　同
葬式の旗も嬉しい抱かれた兒　同　同
手をつなぐ中の子供はちと小さし　神戸小女櫻
あほらしいここにも義埋の耳をかし　同　同
だまされてまで貧乏をする弱さ　同　同
新開の街支那床が一つ出來　同　同
一坪の粟へも鳴子ひつかける　同　同
泣いてさわしまねばよいと子供知り　同　同
すごゝと戻るは金を借りて來ず　同　同
女の子だけにあんなに踊ります　同　同
うちの子は小さいからなと親が出る　同　同
商用にしてはあんまりひまが入り　同　同
珍本をへなゝにして返すことは　同　同
ちよこざいな口をたたいてお暇が出　同　同
全くは嘘いつはりのないところ　同　同

水鼻を落して話さぎらせる　同
停留所まゝ子の樣において行き　同
歳がいた證據に愚痴が餘程ふね　大阪元山
パンクまで行く風呂敷はしかさ持ち　同
許された樣に戀人今日も來る　同
獨身の休んでもよい雨が降り　同
子がないにしてもあんまりはでな拵　同
講談で聞くさ虫氣もなく育ち　同
大きうなる子を見る度に妻の事　同
チト叱り過ぎて女教師氣にかゝり　同
小春日に誰か來るらし氣持がし　同
寢ころんで山が見ねてる出養生　同
掛取は一軒毎に草臥れる　同
寢る時に讀む氣の本が溜つて來　同
乳のませ乍ら通らぬ針のみぞ　大阪夢路
貸してゐる强味の言葉荒い事　同
弟に負ける將棋を思ひ切り　同
雇はれの身さ氣がつけば馬鹿になり　同
店員のドヤ〳〵さ來る散髮屋　同
金持の遊びを知つてからの借　同
抽斗の中では國旗邪魔にされ　同

大阪へ來たがる妹へ意見　同
智惠の輪を子供の留守にやつて見る　同
鉛筆を削り醉ふてるなさ思ひ　同
遊んでる子に取次ぎをたのむなり　同
向ひの子もう中折やトンビ着て　大阪柳人
病院を出て八百屋迄遠い事　同
あのまゝになつて居ります貸した金　同
ひげだけに丸刈一つまたされる　同
出られるか鯉二三べんはねて見る　同
そふ言ふさ聲まで矢張兄に似て　同
合奏の尺八ねらい首を振り　同
落語家をまねて主人の機嫌よし　同
心安うなつて夜泣きに貸が出來　同
正月に髮だけ結ふた子澤山　同
仲裁も二つ三つは叩かれる　同
今來たは外でもないが煙草つけ　同
苦勞して來た人たけにへこたれず　神戸一休
貯金帳こんなに減つた病上り　同
氣付たさ見へて話をそらすなり　同
灯の消ねた暮らしは父が病んでから　同
好い嫁さ云われるだけに骨が折れ　同

退院に今日嬉しさの窓をあけ　同　同
上品に出されて載く氣になれず　同　同
踊りたい樣な氣もする此の手紙　同　同
不都合をなじるつもりが醉ふて去に　同　同
待合所兎も角背の子を降ろし　同　同
お雜煮に今年は姉が一人缺け　同　同
通帳萬と云ふ字を後家は持ち　大阪　わたる
十錢の品も三越つゝむなり　同　同
逃げる樣な形でラム子をぬいて居る　同　同
行平へ明日のんも焚く一人者　同　同
昨夜から止まつてたらし腕時計　同　同
門口へ迄は二人でくる風呂屋　同　同
千日を素通をした社用なり　同　同
ウドン屋で母はウドンでいいと言ひ　同　同
川風もつめたくは無い二人なり　同　同
失敗が此の身代をきづき上げ　和歌山　左馬
持參金薄命でない額なり　同　同
伊達眼鏡よもやと思ふ人に逢ひ　同　同
才子だけ表裏があると蔭で云ひ　同　同
裏口で言ひ含めてる里の母　同　同
愛盛り鏡の裏を覗いて見　同　同

左前隱居いくらか取つてあり　同　同
金槌をやめさせてゐる電話口　同　同
言付の通りしてるに氣に入らず　大阪　秀哉
言はんこつちやないと亭主もちとあはて　同　同
勉强の前へ座つた許嫁　同　同
慰める女房も少し涙ぐみ　同　同
癇癪が遂に飼犬下駄で蹴り　同　同
水鐵砲止めに來たのへちとかゝり　同　同
狹い／＼樂屋の隅の花輪なり　同　同
小切手を乾かして出す店火鉢　神戸　東洋鬼
獨酌に立たねばならぬ用が出來　同　同
御寮人五目並べにやつと勝ち　同　同
キリストの樣に案山子が立つて居る　同　同
氣晴しと見ゐて棧敷の束ね髮　同　同
妾宅へお上人ともある頭巾　神戸　寸馬
どちらから似たか親爺とブルの顏　同　同
誓文の中にベッタラよく匂ひ　同　同
タワーからザット神戸を見て歸り　同　同
血統がどうであらうといゝ縹緻　同　同
新世帶今日ははうれしゆう何か縫ひ　大阪　波郎
ひろつぱに手のないバケツ裏がへり　同　同

流連へわかりきつたる電話なり　同　同
デツカンショへ又牛肉がにえつまり　同　同
ぎむならん孫に頭をたゝかれる　大阪　乾坤
氣をかへるつもり窓から風を入れ　同　同
忠告に今は合せる顔もなし　同　同
ビク〳〵で通れば向ける馬の鼻　同　同
おこなしい亭主を他所によく喋り　同　同
荷造を終つてお隣りまで掃ぎ　同　同
粉煙草へまだ一週間の日が殘り　稗島　眠聲
新世帶奈良から對の箸を買ひ　同　同
煙草代又ほしいそうに兄は起き　同　同
藝術か知らぬが女房今日も留守　同　同
山登りサッキの人がおりて來る　大阪　凡平
掛取が坊稚の下駄を裏返し　同　同
梯子から隣の庭へものを云ひ　同　同
初戀に破れ社長になるつもり　同　同
悶着に監督鉛筆なめてゐる　大阪　啞人
信號を見つめて寒い運轉手　同　同
うろたへた樣に晩方子は戻り　同　同
試合果て一度に寒い風を知り　同　同
失職のみる灯のいろが霧となり　東京　盜泉
死にましたそれが話の種となり　同　同
青い空山茶花はもう散りつくし　同　同
立話大地へ疵をつけて行き　室　蘭　愚劣
將校が何んだと怒鳴る酒の息　同　同
當然の理屈を女房叱られる　同　同
何もかも棚へ上げるがくせになり　堺　一柳
板圍のここで風呂敷包みかゝ　同　同
足音は確に何か提げて居る　同　同
食ふ見込つゐて結婚しに歸り　平壤　美濃守
秋の川魚の國も見えて居る　同　同
一列の客に連結小さく見へ　同　同
事なきが如く裁判所の朝　神戸　嶺月
交番所道を聞かれて表へ出　同　同
小姑に嫁の言葉は打消され　同　同
鷄のその一匹がきらはれる　神戸　琴月
母上によろしくと文終なり　同　同
覗いてるなと思ひつゝ髪をすき　同　同
下駄箱を買つて二階の腹が知れ　池田　默太
心細さが云はす上手と見てとられ　同　同
聞きもせず乘過ぎて行く馬鹿らしさ　中津町　竹榮
郊外の電車にのつて氣がゆるみ　同　同

戀人にしては餘りに熱がなし　西宮　二葉亭
横町へ曲れば長い雨が降り　同　同
掛けるところもあるに娘は横に立ち　大阪　一路
父兄會白狀せぬも親の情　同　同
レコードで聽いて呂昇を惜しむ也　大阪　時雨郎
いつときのそのいつときを樂しがり　同　同
荷にならぬものだけ持つて國に行き　横濱　三拍子
新開地もうすぱらしい湯屋が立ち　同　同
箱火鉢今日の寒さで焦けて來る　堺　夢六
姉さんへ六錢貼つたのが來てる　同　同
新築へ移つて店員一人ふえ　大阪　薫流
注文を聞違へて來る百貨店　同　同
店火鉢かゝえるやうにして座り　神戸　天魂
紋附の紐をしめしめやつて來る　同　同
緣附けをさせて交際一つ增え　堺　不越
板圍覗くと他所の裏が見ゆ　同　同
當局の落度にすれば輕るう見ゆ　大阪　柳花坊
味の素奧樣だけの味を出し　同　同
色街へ來て知つた妓に叩かれる　山口　吐露坊
本通り廻つて歸る月給日　同　同
純毛の襟卷をして丁稚が來　大阪　しげる
奉公をする氣女房の家出なり　同　劍呑坊
暫くは淋しう暮す孫が去に　神戸　山美
籠の鳥覺ゆて歸る二年生　赤穗　呑氣坊
別莊へ植木屋思ふやうに植ゆ　大阪　蔦歩
身のほゞを知らぬ理想にくたぶれる　鞆町　柳雪
新建へもう蟋蟀が來て鳴れた　大阪　義矢滿
褲外して使の處聞きなほし　福岡　句一坊

初句會の夜の出來事

（川柳家失敗談）

山口吐露坊

山口川柳會を始めて開いた夜、定刻に續々入場の時、女關をは入つたところに、妙齡な婦人が座つてゐる。氣にかゝると見て洲馬氏が『貴女は此處の娘さんですかと』質問に及ぶと『川柳會に參りました』との事、あとで婦人は唯一の閨秀作家露草女史と分つて洲馬氏曰く『女の人が川柳會に來ることは思はなかつた……』と嬉しそうな顏。

其夜會更けて、遠路の露草氏が再び氣にかゝると見ゆて『誰かに送らせませうか』と云ふと女史は『弟が居るから宜しう御座います』ハテナ合點の行かぬ事と思ふと傍で大男の琴波氏（露草女史の令弟）がニヤリ〳〵。

主幹と私

太田徹底郎

川柳雑誌が、茲に、一周年紀念號を出して、尚、益々發展せんことの基礎を造ることが出來ましたのは、一般愛讀者諸君並に、先輩諸氏の、深甚なる御後援に因ることは勿論でありますが、私はこの外に、同人の結束と、それを維持して來た主幹の力といふものが、與つて大であつたといふことをも認めて貰ひたいと思ひます。同人の結束!!それは同人間を流れる熱い友情の結晶であつて、私達は、川柳といふ趣味の集合體であるけれども川柳以外にも、眞の兄弟の樣な、それは溫かい血が通つて居ちから、よくある同人間の勢力爭ひといふ樣なことは一度も起つたことがないのであります。それも三人や五人の同人なら兎も角二十餘人のそれが皆川柳家の通有性ともいふべき比較的理智にたけた人々でありながら、しかも溫かい友情の中に結社が續けられるといふことは決して偶然ではありませんそこには主幹路郎先生の努力と、先生自身が敬慕さるべき人格の持主であることが主なる原因であることは勿論であります。でありますから我社では同人間相互と、主幹との關係は、一家族の樣で前にも述べました樣に川柳以外の個人的提携が、最も深厚であるのであります。それで私が主幹から受けた交誼の一端を披瀝して、川柳雑誌社の空氣を、知つて貰うことにいたします。

私の昨年は、最も變遷に富んだといふと聞なればよいが、實は色々な一身上の災厄に逢つて、可成頭腦を痛めました。煩悶に堪へられなくなつた私は、何時も遲日壯を訪れました。そして主幹や奥樣（同人葭乃女史）に萬事を打ち明けるのでありました。するとほんとうの兄弟も及ばぬほど、眞劍に慰めて呉れられるので歸りには、必ず一道の光明を見付けた樣な氣持になつて元氣よく足を運ぶことが出來るのでありました。主幹はまた私達に親切なばかりでなく、川柳對にして

川柳書架（八）

川柳類纂

（花岡百樹編）

▼この書の凡例を次に擧げて見ると。一こゝに收めたるは、專ら江戸の川柳を代表すべき寶暦より天明に渉るものより拔萃したるものなり。一人口に膾炙して、既に俗諺的通句となりたるものは、概むこれを省きぬ。一甲乙戰れの題に入るとも苦しからざるものは、便宜に從つて一方の題に入れたり。一最難解のものは、これを附錄として收載せり。研究せられなば興深かるべし。

▼目次は類題いろは別になつてゐる。

▼明治三十八年七月廿五日發行。菊半截二〇〇頁。定價金二十五錢。發行所は東京本鄕區駒込西片町十番地内外出版協會である。

▼この本が出版された當時に、私は新本

も殆んど本業を忘れて、柳論に花を咲かされ我等を致へられるので、夜の更けるのも知らずに遂に終電に後れて泊ることなどは、珍らしくありませんでした。そして私がいつも勿體なく思つたのは、私の歸りが、何時であらうとも、主幹自身で、電車の停留所まで見送つて呉れられるばかりでなく、私が電車に乘つたのを見てから初めて踵を返されるのでありました。これは無論私一人に限らず、遲日莊を訪れる總ての人が、こうした溫かさに恐縮する相であります。

私は昨夏或事情のため、遲日莊で約一ケ月ほど、厄介になりましたが、何時も春の樣な暖さと、溶解さうな圓滿さに滿たされて居て、自分でも、ほんとうの家族の樣な氣になるのでありました。そしてその間に、私の一身上の事に就ても、色々と奔走して呉れられました。丁度その頃他の川柳社の人が訪ねて來られたことがありましたが、私に對する主幹の厚い情誼を親しく見て、主幹の義俠心を稱讃されると俱に、川柳雜誌社の益々發展する原因もこゝにあるのだと、云はれましたが、誠に其言葉の通りであります。

然し同人の中でも、私などは最も世話をかけました一人でありますが、そうした個人的に何等交渉のない他の同人諸君にも、その情誼に於ては少しも變るところのないことは勿論であります。そして主幹のさうした親切は、決して我々同人の歡心を買うべくされるのでないことは申すまでもなく、そうした表面的な行爲を最も嫌はれる人であるだけに尙更敬慕の念を起すものであります。今まで述べましたことは、ほんのその一端に過ぎないことでありまして、川柳雜誌社には何時もそうした氣風が漲つて居ります。

そしてそれが一つの信條となり、また不文の社規ともなつて、愈々團結を堅くし主幹始め同人一同が、歩調を揃へて、柳界のために、懸命の努力を惜まないのであります。

世の先輩諸氏並に、本誌の愛讀者諸君、私達のこうした陣容に對し、更に御鞭韃の榮を賜はらんことを切に、切に、お願ひする次第であります。（大正一四、一、四）

問と答

二　柳子

場所　四天王寺前

田舍者　帽を取つて『大阪で一番良い所は何處だんべい』

巡査『こゝらば一番だ日本最古の佛法の寺四大王寺はある、それに天王寺公園から新世界、通天閣、それに住友邸があるから……』

田舍者　あつ氣にとられ、再び『千日前と言ふ處はどんなところだんべい』

巡査『芝居や活動や其の他いろんな寄席が澤山あるところだ』

田舍者である彼れは千日前を一番良い所として千日前を聞いて去つた。

を廿錢位で買つたと覺えてゐるが、最近外骨氏が大阪長堀の岸松館で催された古本交換會では八十錢で漸く私に落ちた位であるから大ていこの本の價値については想像が出來るであらうと思ふ。

特別募集句發表

旅人　龜井花童子選

集句五〇九章

この部屋も雨の旅籠に欠伸する　其笛
商用の序てに趣味の友を訪ひ　新坊
旅人の方へ案山子は向いたまゝ　松郎
旅人へ秋の日足の短かすぎ　松雨
汽車の旅豫定を變へる知己が出來　新坊
淋しさは旅に病む日の雨の音　同
品川の繪に旅の人町の人　義矢滿
旅人がさす傘の太い文字　竹榮
小一里と聞く頃旅の日がくれる　三拍子
旅人へ定宿のまだ遠いこゝ十字路　利喜馬
旅人の疲すこゝにはない番地　狸巷
心もとなく宿引へ荷を渡し　狸巷
床の間へ荷物を下す旅商人　三拍子
旅人は局の横手で局を聞き　義矢滿
地人
旅人へ木枯寒う吹きつける　二葉亭
天
旅人の僞りもなくよく寢入り　義矢滿
軸
旅人に都大路の目まぐるし　花童子

因に旅人の卷は集句の割に收獲の少かつたのは類想の多かつたのと題外の句が大分見えたのに起因する。今一つは下五に於て餘情のない句それは北海道の私の選へ投句された事を遺憾に思ふ。

弟　柳川洲馬選

弟をつれてうつ向き勝ちになり　松郎
弟の嫁に出戻り邪魔がられ　新坊
弟の僻はそつくり叔父に似て　狸巷助
弟が戻つてからが家がもめ　劍呑坊
弟はほんとうの事ばかり云ひ　しげる
紙狹み弟は甲を出して見せ　竹榮
弟はもう女湯へは行かぬなり　同
顏に墨つけて弟戻つて來　廣賀
弟と母親暮す事になり　助六

呼び捨てに出來ぬ弟年になり　一路
弟を泣かして兄は遊びに出　無名
改札の口だけ弟抱いてやり　山月
鼻聲は一錢呉れと云ふ時分　同
金ためる兄を弟あざ笑ひ　時雨郎
讀めもせず矢張り見たい兄の本　水鏡子
弟も少うし出資て店開き　柳人
久し振り歸つて弟案じさせ　凡平
瓜二つ時々兄と間違られ　愚劣
叱言云ふ姉に弟尻を向け　一休
又兄に叱られて居る玩具箱　同
弟の目に兄さんの不甲斐なさ　わたる
弟の眼に莫迦らしい兄と姉　盜泉
弟に分からぬ起きる日曜日　天魂
樂書を讀んで弟笑はせる　吐露坊
義理の字がついて小さい兄を持ち　眠聲
叱られた弟兄の事を云ひ　秀哉
踏切を弟先きに越して待ち　同
仕返しに弟方の腕もかり　紫灯
家出した譯を弟だけが知り　利喜馬

弟のニキビを姉はきたながり　波郎
弟でも無條件では働かず　木屑
嫂に優る弟嫁を持ち不越
弟が引きずり出した情話集　琴月
特長のある字で弟から便り　柳路
弟に持たせて歸へし遊んでる　三拍子
弟の意見も伯父は聞いて見る　駒人
弟が出來て獨りで寢るときめ　志貴南
弟を連れて燒芋買いに行き　久樂
弟に相談をして仲がよく　其笛
弟をなかに二人は眼で話し　乾坤
弟の方が博士になつて居る　花童子
弟は姉を慕うて邪まがられ　一夫
泣かされた胸に兄貴の顏が浮き　馬行
フン〳〵と素直の弟金を貯め　同
(佳)弟の嫁と云ふのが美しく　しげる
拳骨を見せて弟の菓子を取り　紫香
弟が居つては邪魔な人に逢ひ　一休
とうさんの聲で弟を呼びに來る　吐露坊
弟は默つて鍋をつゝく事　寸馬
(人)弟の氣は父に似ず母に似ず　百石
(地)弟を泣かした奴を又泣かし　松郎
(天)弟は木の下に居て拾う役　元山
(軸)約束の日に弟へ菓子をやり　洲馬

松　竹田芦穗選

松並木まだか〳〵と汽車に倦き　義矢滿
打ち開ける氣で松原を二度通り　紫汀
手を入れた松へはつゝ月が出る　山美
もうだいぶ醉ふてる聲の松づゝ　時雨郎
同窓會紀念の松を見違へる　廣賀
松飾り子供ばかりの街となり　松郎
旅疲れ松の舞子を起たされる　十字路
門松へ年禮危く倒けかくり　百石
門松の向ひ合はせは意地のやう　馬行
松風の音別莊へ冬が來る　愚劣
國の名が變る峠の太い松　久樂
歸朝する兄の鬚く松を活け　其笛
差し上げて夜店を拔ける松の鉢　綠亭
松飾り忙しい亭主呼びに來る　助六
クレオンで松ばつかりの生た山　久樂
分別のつかぬ二人へ松の風　雅幽
傳說は傳說松はよく茂り　馬行
心配の早や松原を通り拔け　波郎

五　容

折檻の笞で松の雪が散り　義矢滿
申譯だけの門松釘で止め　紫汀
海岸の松は遁げ出す姿なり　しげる
旅僧が繪になる暮の松並木　新坊
復興の氣で門松に旦那凝り　東洋鬼

人

銀行は一日早やい松を立て　馬行

地

城趾は今松風の音ばかり　鳶歩

天

傳說の松が事待つやうに伸び　波郎

店先　高橋古城山選

店先の將棋に娘買ひ遲れ　其笛
店先に最前からの人を見る　乾坤
店先をお客の犬がちと汚し　馬行
愛嬌のよい店先の笑ひ聲　綠亭

店先で眼と眼と見合ひすだけの戀　默太
店先へ轉がす馬車の荷は重し　愚劣
荷造りをして店先を取り散らし　一柳
人力車さて店先に人は居ず　一洲
店先で手織木綿の母と逢ひ　十字路
店先へ夕刊音をたてゝ入れ　元山
素見しも無く店先へ寒い風　志賀南
店先を覗いて廻はる法界屋　天魂
駄菓子屋の門で子守等は唄ひ　柳化坊
荷造りに店先だけの塵埃を立て　夢六
出雲屋が燒くのを見てる人だが　時雨郎
店先へ女中時間を問ひに來る　一休
御無沙汰が遂店先を通り拔け　薫流
評判の其後娘を店に見ず　阿久
店先の模樣を替へる學校出　呑氣坊
店先が狹まい南京町の朝寸馬　盜泉
店先へ丁稚は母に呼び出され　駒人
開店の日の店先に髷も見え　利眞馬
店先へ尻を向けてる東西屋　不越
店先は出張所と云つた型　久樂
店先をチラ〳〵舞妓はん通り　花童子
お店先よけて通つたを實直さ　美濃守
店先で今日の人出を見定める　劍呑坊
店先は空の箱まで竝べさき　眠聲
店先の品を鏡で倍に見せ　善市
近い内なぞと店先まで送り　松雨
店先へ逃げて撒水やり過し　鳶歩
店先で王手々々と公休日　柳人
青物屋少うし店の邪魔になり　俊坊
店先へ都合の惡い興信所　新坊
店先で泣かして子守邪魔かられ　東洋鬼
店先へ丁稚の姉が尋ねて來　凡平
店先を賑やかにする女客　助六

佳　作

店先で養子は養子振を見せ　馬行
朝風呂へ店先からの聲をかけ　紫灯
店先で女同志はひまを要れ　山月
店先を汚す運送屋は歸へり　二拍子
憚りのある店先へ傘を曲げ　義矢滿
ちと儲けたのか店先をやり替る　竹桑
店先を覗けば帳場からお辭儀　狸巷
店先で電燈料はつくほつて　松郎
店先へ旦那揚杖でほせつて來　美濃守
店先の火鉢客まで押して行き　助六
店先へ朝鮮人の背が高し　俊坊
店先の柄は女將の氣に要らず　睡花
店先へ旦那は趣味の鉢を出し　凡平
通り過てから店先のいゝ話　吐露坊
片付てゐる店先へ荷が屈き　東洋鬼
店先へ來て許嫁邪魔をする　秀哉
店先で濟む用談に茶が這入り　新坊

五　客

店先へ捨てたを旦那拾はせる　義矢滿
押賣のもう店先で擴げ出し　波郎
店先をちらりと覗く長襦袢　しげる
若旦那店先へ來て氣が變り　松郎
文使ひ店先へ來て覗くなり　百石

人　位

いゝ客へ店先聲が揃ふ也　吐露坊

地　位

呑み乍ら店先を見る親旦那　琴月

天　位

店先へ出てわが店を考へる　山美

追加

店先に少し慌てた懐手　古城山

金庫　吉川啞人選

借金をしてまで金庫据へてゐる　劍香坊
掛取りへ手提金庫のりんがなり　竹榮
嫌疑者は金庫の符合知つた人　狸巷
あけにくひ金庫に今朝もつゝがなし　東洋鬼
今日入れた金をもう出す金庫なり　時雨郎
債權者金庫の空らも覗かされ　阿久
あるだけの金を入れてる金庫なり　薫流
これぎりと親父金庫をあけに立ち　一休
大金庫だけが事務所の姿なり　睡花
燒趾の金庫その儘三日たち　一柳
誓文の中に交りて金庫店才　馬
新聞を離れて金庫あけてやり　秀哉
銀行の金庫四五人這入れそう　紫灯
燒趾の無事な金庫へ旗がたち　百石
こも角も見よすと國庫あけさせる　琴月
新しい金庫が目立つ店開き　志賞南
掛取の耳へ金庫をあける音　乾坤
本金庫僅かな金に手間がこれ　鳶歩
地下室の金庫大きな音であき　三拍子
金庫番眺へ向きの顔に出來　柳雪
目の醒めるたんびに覗く金庫番　吐露坊
眼にとまる金庫を楯に申入れ　一洲
退屈は金庫の方へ向て待ち　同
店仕臺木綿が殘る大金庫　新坊
一號の金庫を据へる本普請　同
是しきの店に金庫を据へて居り　紫香
孫も亦金庫へ目の付く年になり　同
金庫から玉葱を買ふ錢を出し　二葉亭
關取の樣に金庫は据へられる　同
借金が有るとも見ぬ金庫なり　凡平
夜店から女工金庫を買ふて來る　同
金庫番咳をするのに四角張り　盜泉
景品に呉れるは手提金庫なり　同
番頭が金庫我物顔にあけ　不越
金庫に會社の秘密しまひ込み　同
金庫屋廣告挾む火事の記事　久樂
金持の金庫女關から見えず　同
燒跡の金庫丁稚二人居り　駒人
御無心に手提金庫がにくゝ見え　同
燒跡へ金庫泰然自若なり　松雨
不渡りとも知らず金庫へ大事そう　同
よく見える所へ据へる大金庫　左馬
アノ内にウヨトあるなと思つてる　同
引越に金庫一番後にされ　利喜馬
ごつしりと金庫を据ゑる假事務所　同
懸賞で貰つた金庫困り果て　わたる
金庫から月に一度貰ふなり　同
子供にも錢を貯めよとポスト形　山月
金庫の前で立會ふ刑事連　同
漸くに金庫はあく音になり　十字路
大掃除金庫は邪魔なものにされ　同
不景氣に金庫へ愚痴も云て見る　しげる
增えるのか減るのか金庫八文字　同
遺言であける金庫の手がふるひ　同
千二千金庫へ行儀よくならぴ　波郎
隱れてたやうに金庫の後から　同
大金庫銅貨があると思はれず　同
金庫から出しておかしい程の寄符　其笛
親旦那金庫をすがりものにする　同

金庫からついでの小判一寸見せ　同
厚司着てゐても金庫を二つ持ち　義矢滿
天勝は金庫の裏へ灯を點し　同
金主から見れば小癪な金庫なり　同
月給は金庫に入れる程もなし　廣賀
ナフタリン金庫の下へ轉げこみ　同
金庫まで父親馬になつてやり　同
金庫を据えるに且那尻からげ　助六
珍らしく金庫なてたり叩いたり　同
不景氣は金庫の知つた事でなし　同
金庫から古證文の端が見ゐ　花童子
金庫から何を出すのか首を入れ　同
金庫から出す小遣ひは一トつかみ　同
鞄屋の樣には金庫屋の積めず　松郎
金庫屋に家でもつぶしさうな棒　同
給仕金庫へ這入つて終ひさう　同
取付けは金庫の知つた事でなし　同
支配人金庫の方へ煙を吐き　同
蟻が餌を曳くやうに金庫が來　馬行
遺り繰りを見る金庫の扉は締り　同
大金庫背負ひ叱言の云ひたい眼　同
物堅い腰に金庫の鍵が鳴り　同
信用をせよと金庫は構ゐてる　同
勤續十年金庫の艶を見て暮し　同
（五客）燒殘る金庫を撮って宣傳し　新坊
こそ泥に事務所の金庫大き過ぎ　東洋鬼
勘定の合はぬ金庫にフケが飛び　其笛
秋晴を金庫預かる小間使ひ　義矢滿
出納課金庫は俺が物のやう　花童子

人

嬢さんの趣味が金庫の上で咲き　琴月

地

欠勤の屆金庫の鍵と來る　吐露坊

天

むつとして金庫大きく開に立ち　松郎

選後に　啞人

金庫の句は佳句の多かつたのに誠にうれしかつた、いゝ句があると選をするにもいゝ氣持であります、序に私は今回家事の都合上川柳社同人をやめさして頂きました。創刊一周年號に際して誠に殘念でありますが過去一ヶ年間の同人としての無責任を今更深く感じます。これからは讀者として自由に川柳作句いたします。何卒倍舊の御交際をお願ひいたします。

牡蠣船　塚崎松郎選

牡蠣船を出て橋の名も覺へこき　竹榮
牡蠣船を尻向けに乞喰坐つてる　劍呑坊
牡蠣船へ素人でない歩きやうしげる　同
橋詰こだけで牡蠣船手紙が來　同
橋があり牡蠣船かあり人通り　同
足音が續く牡蠣船搖るぎ出し　一洲
牡蠣船へ橋の往き來も更てくる　十字路
牡蠣船を出て滿潮の岸を見る　同
牡蠣船へ丁稚初めて伴れられる　廣賀
牡蠣船の灯を水に見る橋の上　同
牡蠣船へ渡る足元危ながり　乾坤
牡蠣船へから〳〵こ藝者來る　久樂
牡蠣船へ倅を伴れて落付けず　其笛
牡蠣船で殺風景な船を見る　同
牡蠣船へもう冬の日は暮かゝり　松雨
打出しに牡蠣船二度の客が混み　義矢滿

牡蠣船で大分風の出たを知り　琴月
坂町へ牡蠣船からの電話なり　百石
牡蠣船の水に映つて景になり　秀哉
牡蠣船を出てから冴る下駄の音　吐露坊
牡蠣船で待つ間向ひの船を見る　波郎
牡蠣の搖れてる事を女將知り　同
牡蠣船の家根が埃りで白いこと　寸馬
牡蠣船の煙柳を拔けて行き　わたる
牡蠣船へ落付いて聞く果太鼓　時雨郎
水上署牡蠣船を見て通り　同
牡蠣船へ來て聽く川蒸氣　東洋鬼
牡蠣船を出て擢れ違ふ寒念佛　同
牡蠣船の前にいつもの夕刊屋　助六
牡蠣船を開けると健腦丸が見に　鳶歩
牡蠣船に搖れて取引一つ出來　馬行
灯ゆらる水を見つけて牡蠣を食ひ　同

佳句

牡蠣船へ工事の砂がちこぼれ　しげる
牡蠣船の仲居濕れめやうに酌ぎ　同
牡蠣船を出て橋の上一寸見る　其笛
落着いて呑む牡蠣船に水の音　秀哉
牡蠣船が動いてほしい程に醉ひ　波郎
牡蠣船をよつぽど呑んだ顏で出る　吐露坊
川に居るまゝで牡蠣船修繕される　わたる
牡蠣船へ餘つ程歩かされてくる　東洋鬼

人

牡蠣船へ女房こ來るも久し振り　元山

地

更けてゆく中に牡蠣船だけ殘り　乾坤

天

水上をいつか忘れて牡蠣を食ひ　馬行

軸

牡蠣船の衝立一つ女連れ
牡蠣船にマントは肩を脫いだ

牡蠣船　神崎一閑子選

牡蠣船の狹い臺所見て通り　助六
牡蠣船の歸りは橋の名も覺へ　竹榮
牡蠣船は立つた拍子に騷がれる　劍呑坊
牡蠣船を餘つ程飲んだ顏で出る　吐露坊
牡蠣船も行けば惡くはない所　元山
閉めきつた儘牡蠣船は更に行き　紫灯
牡蠣船へ二次會ゝしい元氣で來　琴月
牡蠣船で打ち明けられた涙なり　十字路
旦樣の電話牡蠣船からかゝり　廣賀
牡蠣船を出ると川から寒い風　久樂
牡蠣船は今日大潮の高さ也　其笛
牡蠣船の閑なボートを見て話し　秀哉
牡蠣船の勘定は幹事別に割り　阿久
水上署掃く牡蠣船を見て通り　時雨郎
牡蠣船でゆんらりゆらり待たされる　盜泉
灯が入つてからの牡蠣船景になり　百石
足音の續く牡蠣船搖ぎ出し　一洲
牡蠣船にもう冬の日は暮かゝり　松雨
牡蠣船へよつぽど歩かされて來る　東洋鬼
ぶつつかる樣な牡蠣船音を聞き　一休
牡蠣船の電話を母が不思議がり　乾坤
牡蠣船の柱ゆすつて見たくなり　しげる
牡蠣船の灯に大坂をなつかしみ　新坊
牡蠣船を出ると冷たい川の風　寸馬
牡蠣船のあんなこから水を出し　丸平
牡蠣船へ云ひたい事を持つて來る　馬行
沈めへんかいな牡蠣を喰ひ乍ら　同

牡蠣船で年増にされて寒い晩　義矢滿　汽笛でも鳴つて牡蠣船動きさう　馬行　牡蠣船が動いて欲しい程に醉ひ　波郎

證據物件（川柳家失敗談）

大阪　西村山月

或る日句會に出掛けやうと思ふて夕飯を早く濟まし、一寸鏡臺の前の人となり、砥石で剃刀を研ぎ若作りに顏を剃る所へ裏口からお隣の若い方の伯母さんが見て、『エライおめかしでんなニキビ迄取ろと思ふて』とひやかされる。間もなく端の坊へ掛けて着席すると御連中の一同がエライ人ばかりに見ゐて耻かしく思ひました。一同の方は色々の面白い話を互にしては笑はせてゐましたが、自分はタツタ一人ボツチでションボリとしてゐました。其うち各の席題兼題のビラが出て五句三句と卅句程を一生懸命に作句して出しましたが披講の時になつて一句も拔けず自分で巧いと思つても此ではアカンと悲觀中又復一題席題が出ましたので又之に五句を投じました。今度は互選で一句丈け拔けました。之で來月分の雜誌に申譯があると樂しみの中に散會されました。其の歸り道自分より先へ二人の來會者が歩いてゐますその話を途切れ〳〵に聞けば『アノ……　新米の中は……あほらしいなア……』と闇に自分の事を云ふてゐるのかそれとも人の事か知らんと氣が揉めるのであつた。愈々停留所へ着いたが又マンが悪い電車は仲々來ず來たと思ふと滿員です後へ願ひますチン〳〵と尻喰らへ觀音でエライほこり、次のは行先が違ふし、次のは故障車だし更に十分程待たされヨウ〳〵の思ひで乘込んで車窓から電氣時計を見れば十一時半（夜）を過ぎてゐる。大急ぎの氣味で乘ツこるものゝ仲々遲ひ、が其うち目的の停留所へ着きかゝり直車掌臺から鎖を外し飛降りたが其鎖の環が袖に引掛り肩先から少し綻びて下駄も花緒が千切れたが其儘大急ぎで歸り着いたが時計は大遲刻の十二時が強く報じたのであつた。翌日妻は時間の遲い事、袖が綻びてる事、雅號の手紙の袂にあつたこと、（これは柳友から川柳に關しての手紙）端の坊が有馬溫泉地の料理屋の名に似てる事、下駄の事までは知らぬらしいが以上の事を着物をたゝみながら有力な證據物件でも押取したかの如くなので自分は來月に川柳雜誌を見たら一句ある事を陳述したがなかなかそれ位の辯解では承知してくれず、益々『赤い顏青筋立てた地圖のやう』に右の證據物を突付る有樣には大へこたれでした。

新年雜吟

東京　武笠山椒

おれもまだ生きて居るぞと年賀狀
謹賀新年まあ彼奴にも出して置け
旅行中の顏が玄關へひよつくり出

○

半歲の洋行あちらでは〳〵
出來たのでやたら戀愛至上主義
厚化粧十を頭に四人也

お醫者さま

神戸　蘆田義代子（十二歲）

お隣へ今日も霧吹貸してあげ
空樽へあがつて鷄がまたうたひ
もう私それでも電話かけるのよ
一散に逃げて行くのはごんたです
人形もつれてお風呂へゆくと決め
お向ひも蚊取線香の火がみえる
おはじきの石を兄いさん踏んでゆき
しづ〳〵と止まる俥はお醫者さま
チャツプリンのやうに番頭さんひ
あゝうれしやつぱりおなじ女の子

忘年句會

堺市大濱潮湯

家族温泉樓上貴賓室

南海電車池澤原治郎氏の後援で堺市大濱潮湯家族温泉樓上貴賓室を特に本社のために開放され師走二十日午後一時から忘年句會をいたしました。潮湯にひたる者少女歌劇を覗いて來るもの脱線的な談笑裡に開會し句作數刻やがて酒杯を交へて午後九時すぎ散會しました。（二柳子）

路郎、溪花坊、しげる、一醉、かほる、不越、一路、眠聲、波郎、双柳、刀三、馬行、松郎、一聲、芦穂、樂居、薫柳、一柳、二柳子

公園　路郎選

いさかひの水の淋き公園に來る　刀三

公園の書なりバイブルの光り　同

公園へ來ても代數解けぬ也　同

公園のベンチを汚ながる晴着　芦穂

公園で乳母と乳母との長話　同

公園でよく逢ふ女タイピスト　駒人

よい智恵もなく公園で夜となり　同

公園に見合の橋といふができ　樂居

公園を横に見てゆく金儲け　馬行

公園で噴水一つ冬がれる　溪花坊

夜るの公園へ短氣を捨てに行き　松郎

公園で猿の背延びを見て戻り　双柳

公園地女の連が欲しくなり　一醉

園丁は寫生の人へ話しかけ　波郎

公園を抜ける姿も十二月　一柳

藥瓶公園まわる程になり　悟郎

少女　溪花坊選

歌劇志願お嫁になんか行かない氣　路郎

大股の僅に少女は下駄をぬぎ　かほる

孝行と云ふが少女に解りかけ　馬行

親切へ少女はいやと云つただけ　松郎

無造作に少女ショールを卷いてる　芦穂

花十三へ少女づれが入つて來　二柳子

面憎い事を少女はしてみせる　刀三

縄飛びに飽きた少女の唄になり　波郎

はづかしう少女挨拶して歸り　不越

誘拐をされた少女の寫眞が出　双柳

今習ろた唄を唄つてゐる少女　しげる

少女の哀れみこんな事に泣き　一醉

慰問品知らぬ少女を戀しがり　眠聲

（五）笑つてる話少女は手を重ね　馬行

一等の選手と少女映される　松郎

不良少女親爺がいつち可愛がり　樂居

少女また牧師へ一寸あまへて見　芦穂

いゝ日和少女寫眞の題にされ　しげる

（人）少女藏の壁へもたれる癖かつき　路郎

（地）靴履くちとかつぱつにる少女　松郎

（天）英ネルを着ると少女の背が高し　刀三

（軸）お師匠の顔色ばかり見る少女　溪花坊

炭俵　互選

掛取をしばらく待す炭俵　蘆穂

炭俵だけにはつきり霜が見ゐ　同

もう冬の日射し炭俵をはなれ　松郎

炭俵だけのほこりにあらずして　同

あかきれの手でかさ〳〵と炭俵　かほる

炭俵小炭になると横にされ　同

女中の留守を炭俵まで來る　刀三
炭俵落すと妙な形になり　同
出世した家米俵　炭俵　波郎
妾宅の裏手へ細い炭俵　同
無羅作に片づけられた炭俵　路郎
雨傘をとりに炭俵に摺れる　溪花坊
炭俵あけるに障子閉めに來る　二柳子
炭俵休んだとこが知れるなり　馬行
炭俵かつぐたんびに顏よごれ　一路
バンバ入れとて炭俵とつて置き　一醉
炭俵置場をかへて手が汚れ　不越
春場所へ高々積んだ炭俵　一聲
炭俵のまゝ使つてる新世帶　しげる
炭俵一杖だけの暖たかさ　眠聲
炭俵ある隈つこの暗いこと　双柳

商品券　互選

商品券あいさに他店とまちがはれかほる
古らしく見へる蒲鉾屋の切手　同
御主人の留守へ切手が屆ひてる　刀三
切手だけ買ひに白木の客となり　同
商品券盆に貰つたまゝ殘り　眠聲
商品券もすこしたすと帶が買へ　同
商品券殘りお茶菓子買うて來る　一路
氣が利いた株に商品券を呉れ　同
商品券身分に過ぎたものをかひ　路郎
お辭儀から少しはなれた商品券　松郎
商品券だけのお客で早い事　馬行
正札に商品券がちと足らず　芦穩
小間使切手をもつてあとにつき　波郎
三越へつれられてゆく商品券　一聲
あんまりに商品券は見へすいて　薫柳
入換へて商品券は又贈り　双柳
ごないとしやはるやろの商品券　しげる

南海線　互選

車中から住吉一寸拜まれる　路郎
龍神でここで失敬するといひ　同
萩の茶屋看板ばかり見せられる　溪花坊
夏だけのものに濱寺されてゐる　同
大濱で大寺餅を聞いてゐる　刀三
泳いでる鯛をみるのも堺なり　同
難波驛はや活動の氣分がし　一醉
もう難波大分醉は醒めかゝり　同
今宮へ六部が降りるうらかさ　松郎
玉手からお供も腰を掛けられる　同
游獵の連れが金熊寺の噂　芦穩
こゝまでが大阪になる大和川　しげる
たつた五分間で去ねと天下茶屋　同
仇浪の高師の濱へ驛が出來　双柳
萩の茶屋サラリーマンが寒く待ち　波郎
分產をしてから通ふ萩の茶屋　馬行
濱寺の重役が來る晝時分　一路
萩の茶屋七三が降りまげが降り　同
食堂車早濱寺も佐野もすぎ　一聲

入營送別句會

十二月四日夜　第三支部主催の下に大阪市西區築港市電託兒所樓上で　本社同人高見柳骨氏の送別句會を催し　左の諸氏の出席がありました。（一聲記）

路郎先生、溪花坊、莢豆、薫流、蚊十、悠々、萬屋、双柳、多門、山月、放馬、わたる、かほる、千代二、馬行、輝翠、柳骨、松郎、史風、柳子、一聲

送別　路郎選

脊競べもしたり見送り待つ時間　溪花坊
首卷をとつて見送り辭儀をする　同
送別に赤い手からもまじつて居　一聲
獨りぼつシンミリ語りたいのも交り　多門
見送りに藝妓も交るお茶屋の子　柳骨
送別に上かんで飲みすぎで飲み　かほる
送別と言つてもおれとお前だけ　莢豆
送別會主賓が立つてちと濕めり　馬行
見送つてくれる母親ふけて見へ　双柳
氣に合ふた同志別れが飲みなほし　悠々
送別の歸り馴みに合つて來る　蚊十
送別と知らず仲居は酒をつぎ　薫流
麥飯の卦で送別笑はせる　山月
(軸)まざ〳〵と見る送別の苦笑ひ　路郎
目に見ぬなやみをもつて見送られ　同

丹前　溪花坊選

丹前で來て辻占を買はされる　路郎
すり硝子丹前の影髷のかげ　同
丹前の猪口はちつこう見えるな　同
丹前が身に添ふ程に宿になれ　かほる
居つづけに丹前をぬぐ事が出來　同
丹前で出てお見舞を受けて居る　輝翠
丹前の肱を付いてる箱火鉢　同
丹前を着て且さんのヒゲが邪魔　莢豆
丹前がまるくおさまる長火鉢　同
丹前にお職の部屋の廣い事　松郎
丹前で這入るに狹まい電話室　同
丹前の袖から風呂の五錢落ち　悠々
丹前のまゝ日曜の灯がともり　同
細長い顔で丹前つり合はず　放馬
ワイシャツの上に丹前着せてくれ　同
丹前を着せられてから脱ぐズボン　史風
うたゝ寢に丹前輕く着せられる　一聲
丹前の首は引込めさうに見ね　馬行
丹前が法被の仕事見て歩き　山月
丹前をきると小さく見ふる父　蚊十
丹前にふと目をつける若且那　薫流

青年　柳骨選

青年の女車掌に一寸惚れ　路郎
東京へ東京へ青年もいつか過ぎ　同
父親の代理青年まさてゐる　同
火事場から戻る青年團へ雪　溪花坊
息子また青年會のことで出る　同
本堂を借りた青年會の採め　同
青年奮闘立志傳なぞを讀み　多聞
青年はマルキのパンにするといふ　同
遼遠の的へ青年苦學する　輝翠
仕合せの青年弱く育つて　同
國を出しあたらうどんの出前持　莢豆
青年の盛りを戀がぬりつぶし　同
青年と云ふ嬉しさをバーの隅　馬行
青年の女嫌ひを下駄に見せ　同
デカンショの群にゆるゆる優勝旗　史風
青年の今日又見せる力瘤　かほる
御陵道青年團の道普請　一聲
肩上げを下して青年會に入り　双柳
青年の腕が突つ張る人なだれ　悠々
天才兒親を裏切る青年期　萬屋

年末　互選

年末に齒の痛い事聞かされる　かほる
年末に今日も藏から母の聲　同
ウキンドーへ年末と云ふ顔が寄り　同
洗ひ屋の雫が掛かる年の暮れ　同

年末は均一と云ふ下駄が賣れ　溪花坊
年末の心になつて仕立もの　同
年末の仕事疊へ蹴躓づき　輝翠
下駄の音高ふ師走の今日も暮れ　同
縫物も日切りをされた忙かしさ　山月
年末の飾りの中を辨當箱　悠々
年末に媾曳寒いとこで逢ひ　路郎
年末と年始とかねた御あいさつ　柳骨
年末に丁稚忙しいだけの事　二柳子
花嫁の姿も交る年の末　一聲
よい年齢になつて年末拜んでる　莢豆
年末をおがしく送る金を持ち　馬行
警察がいそがしいといふ年末　双柳
年末をさほどの用も無く通り　わたる
年末に女房の里へ用が出來　蚊十

藝人　互選

藝人の出這り口の暗いこと　溪花坊
足袋を脱く踊に小屋の外は雪　同
御趣味とは申しながら恐れ入り　柳骨
藝人の息子と見ぬ變つた氣　同
藝人と藝人こゝの温泉にかり　松郎
あんたも藝人やないかと弱い扇　同
男前妙に藝人臭い風姿　莢豆
世智辛い世に笛吹いて生きて行き　同
送別に藝人餘興する氣なり　わたる
藝人の捩鉢卷は外づれそう　悠々
我家を出ると藝人らしくなり　同
あのダイヤもう藝人の指になし　路郎
八木節に藝人らしく無い體　かほる
膝と膝、きあつてるはやし部屋　一聲
藝人は見送りもなく汽車で立ち　双柳
只好きであつたが遂に飯こなり　放馬

散髮　互選

合ひの手が鋏を鳴らす散髮屋　輝翠
おのれより母が喜ぶ髮を刈り　馬行
散髮に來て入營の日をきかれ　同
散髮はメンタルテストの前の晩　千代二
草を刈る樣に頭髮へつてゆき　わたる
散髮に行き風呂へ行き合ひに行き　同
風呂といひ散髮といひ逢ひにゆき　路郎
下剃は大分飲んだ息をかぎ　悠々
散髮をしなはれと間夫叱られる　松郎
散髮屋斷髮といふ娘へ念を押し　双柳
丸刈りになつて折襟笑はれる　放馬

悟郎居小集　十二月十日夜

資本家

資本家にうつむく暇はなかけり　刀三
住友にすれば一錢程の金　同
太い太い花緒をつけてゐる金主　松郎
資本家と資本家嫁の事で逢ひ　同
資本家へ淋しい笑ひ投げる也　百石
何をぬかすと資本家の廻り椅子　馬行
決議文見て資本家は旅へ立ち　春篁

寺

忘れてる樣にも見へる寺の柿　刀三
味噌汁の湯氣にお寺の晝となり　同
やゝあつて寺の時計に目がとゞき　同
團參へさて〳〵寺の多い事　十字路
孫連れてお寺の庭の廣い事　同
あの寺のあつちの辻を教へられ　百石
寺出てもまだ御隱居は拜んでる　春篁
町内は寺の門からあけ初め　悟郎

彩霞居偶會　十二、二三

丹前を着て敵娼の紐を借り　彩霞
玉子酒丹前を着てまだふるひ　同
女房を尻目にかけて河豚を食ひ　時次郎
一年に一度藝者を駕にのせ　彩霞
吉井が兆ふてる肩で輕くまひ　同
支那人も交つて十日戎なり　一洲

編輯後記

▼明けましてお年出度う存じます。本年も相變らず御愛讀下さいますやうお願ひいたします。

▼本誌も創立第二年目の新春を迎へましたので愛讀者諸君の好意に充分酬いるだけのものを出したいと同人一同大いに協議を凝らしてゐましたところ九日から主幹が再び病床の人となられましたので、雜誌の發行が多少遲れることになり、十七日に豫定されてゐた創立句會までが廿三日に延期されるの止むを得ぬことになりました。

▼本社創立一周年記念句會

日時　一月廿三日午後六時

場所　大阪市電清水町停留場西入端の坊

兼題　「父親」五句　麻生路郎選

會費　金三十錢

▼同人高見强二（柳骨）氏は去る十日廣島市電信第二聯隊第六中隊第三班に入營されました。

▼師走に刷らした五萬二千枚の宣傳ビラに記載の振替が大阪三一五四とあるは大阪三一五一四の誤りにつき訂正します。

▼豫て病氣の爲に同人を退きました前第三支部長審骨酒井川鮒氏が一月十三日午後十二時に亡くなりましたので生前厚知諸君へお知らせいたします。

（一五頁の續き）

い。併しこの行き方の前途に俳句の持つてゐる素質そのものが確かにあると云ふことだけは明言出來る。元より川柳にも俳句にもその他に共通な境地はどのものにもある。この句はその一例であるかも知れぬ。

川柳は何處まで行つても川柳で俳句にはならぬ。俳句も又その通りであるが、其處に又こんな句も生じる。この句の內容は實に自分の好きなものである。殼を脫いだ川柳は、此處へも來て欲しい。この句の表現叙法の『君見たへ』は俳句ではないが元祿時代の鬼貫の句などには有りさうな文字である。俗語半談元より俳句であつた。併しこの句は俳句ではない。

さすればどうなるか。これが最初この句を凝つと見て考へたと云ふ問題である。

俳句と川柳との違ひ、似寄つたところ、隣合せのところ、時にお互に畑を這入り合つてゐるところ、それがいがみ合ひするところ仲よくして行けるところ大阪から東京へ行く鐵道のレールは二筋づゝ並んで同じ所を目的としてそして何處まで行つても並んだ別な道のところ時に途中のあるところで相通じてゐる連鎖があるところ、これは自分もこの上考へるが諸君も大いに考へて見て貰ひたい。（大正十三年十二月十五日）

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第二卷第三號課題

一月二十九日締切
（各題二十句以内）

▼花道　篠原春雨選
▼旅費　柳川洲馬選
▼子守　闕本雅幽　岩崎柳路　共選

第二卷第四號課題

二月二十五日締切
（各題二十句以内）

▼爪　齋藤松窓選
▼校長　大島壽明選
▼夜櫻　駒井美の作　麻生葭乃　共選

毎號募集

▼近作柳樽（句數無制限）麻生路郎選
▼各地柳壇（會報）　編輯局選
▼文章（評論研究吟行漫文）

定價

一部　參拾錢（郵税共）
六部　壹圓六拾錢
十二部　參圓

廣告料

特等一頁　五拾圓
普通一頁　參拾圓
同半頁　貳拾圓
五號一行　壹圓

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

第二卷　第一號
（毎月一回十五日發行）

大正十四年一月十日印刷
大正十四年一月十五日發行

編輯兼發行印刷人　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　麻生幸二郎

印刷所　大阪市東區農人町二丁目七番地　藤本兄弟社

發行所　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　川柳雜誌社

振替口座大阪三一五一四番

賣捌書店
（大阪）明文堂　公立社　柳屋
（東京）東條　（京都）三宅　（神戸）米田
（金澤）石井　（松任）三須　（國館）石塚

賀正

新聞雜誌印刷並ニ圖書出版業

其他美術
印刷百般

藤本兄弟社

大阪東區農人橋二丁目
電話東一七〇番・七七〇番

溪花坊編輯

川柳研究新年號の

大大阪

元旦に出つ。內容は岡田博士の柳書の蒐集に就て。花岡百樹氏の古書物語。七拾餘家の川柳國の佳吟。五小集會報。溪花坊の柳壇新春語。表紙繪は竹久夢二氏。扉繪は宇崎純一氏が特に大大阪の爲に彩筆を振はる。其他諸家の寄稿と隨筆滿載普通倍大號。是非斯道研究の方々に一讀を望む。

一部郵稅共金拾五錢

大阪市北區老松町三丁目

賀正　大大阪川柳社

電話北二四五八番
振替大阪四三四〇九番

第三種郵便物認可
毎月一回一日發行
郵代一部金拾五錢
一ヶ年分金九拾錢

一葉書や封筒の宛名を書ます。
一書類の書寫をいたします。
一寫版の印謄刷をいたします。
一臨時筆生の派遣に應じます。

其他百般
寫字筆耕

右精々勉強いたします。御利用下さい。御報參上又は直に御返事致ます。

關西謄寫舘支社
西垣商行
大阪市外南濱一八二

謹賀新年

谷川印刷所

所主 谷川太郎吉

大阪市西區江戸堀下通三丁目一七
電話土佐堀六三〇一番

諸版の印刷

賀正

安井八翠坊

廣島市鐵砲町県庁前
電話三八二番

賀正

駒井美の作

大阪市東區餅差町二二一

賀正

原史風

大阪市北區南同心町二丁目
電話北三七五一

忌服中ニ付年始御遠慮申
上候

龍井花童子

國分市青柳町五〇
電話二〇四三番

賀正　南海電車　池澤原治郎（樂居）

賀正　矢田右大臣　仁川仲町一ノ八

賀正　吉川啞人　大阪市西區八條通北小路八

賀正　久世一路　大阪市西區北福崎町四番地　大正十四年一月元旦

賀正　熊本爲四郎　大阪市外平野郷梅ヶ枝町五丁目二九　雅號廣賀

足跡を嬉しく辿る趣味の道

賀正　福島乾坤　大阪市北區玉江町二ノ六

賀正　德田双柳　阪堺線安立町五丁目一二三

賀正　西村山月　大阪市西區八幡屋町二四八

賀正　岩崎柳路　東京市芝區愛宕町一ノ一六（大虎社内）

賀正　橋本二柳子　大阪市西區八條通二丁目十一

賀正
西垣松雨
大阪市外豊崎町南濱一八二

賀正
太田一聲
岸和田市下野町四一九

賀正
高橋かほる
大阪市南區北炭屋町二〇二
電話南五九六番

賀正
高橋古城山
大阪市外中本町中濱三五〇

賀正
竹田芦穂
大阪市西區八條通二丁目南小路

賀正
黑木莢豆
兵庫縣六甲苦樂園

賀正
松本助六
大阪市外平の郷梅ヶ枝町五丁目

賀正
森田輝翠
大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇

賀正
關本雅幽
大阪市西區鶴町四丁目十三號
嵐山方

賀正
麻生路郎

謹賀新春

店主　藤堂卓

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹　麻生路郎

岩崎柳路　原史風
橋本二柳子　西垣松雨
德田双柳　龜井花童子
太田一聲　太田徹底郎
高橋かほる　高橋古城山
高見柳骨（入營中）　竹田蘆穂
武田彩霞　竹内多聞
宗清夜調　黑木莢豆
矢田右大臣　柳川洲馬
松本助六　駒井美の作
麻生葭乃　佐々木默闇
宮内一洲　森田輝翠
關本雅幽

第一支部　大阪市西區八條通南小路　幹事　橋本二柳子
第二支部　大阪市北區南同心町二丁目四五〇　幹事　原史風
第三支部　岸和田市下野町四一九　幹事　太田一聲
第四支部　大阪市西區鶴町四丁目十三號地嵐山方　幹事　關本雅幽
第五支部　大阪市東區餌差町二二一番地　幹事　駒井美の作
第六支部　兵庫縣武庫郡六甲苦樂園　幹事　佐々木默闇
第七支部　大阪市外南濱一八二　幹事　西垣松雨
第八支部　神戸市旭通二丁目八三　幹事　宮内一洲
第九支部　山口縣山口町石原小路　幹事　柳川洲馬
第十支部　神戸市中山手通二丁目九五　幹事　武田彩霞
第十一支部　東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内　幹事　岩崎柳路
第十二支部　國館市青柳町五〇　幹事　龜井花童子
第十三支部　大阪市外平野鄕梅ヶ枝町五丁目　幹事　松本助六
第十四支部　朝鮮仁川仲町二丁目八　幹事　矢田右大臣

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回十五日發行）
大正十四年一月十日第二種郵便物認可　大正十四年一月十五日發行
第二卷　第一號
定價金三拾錢

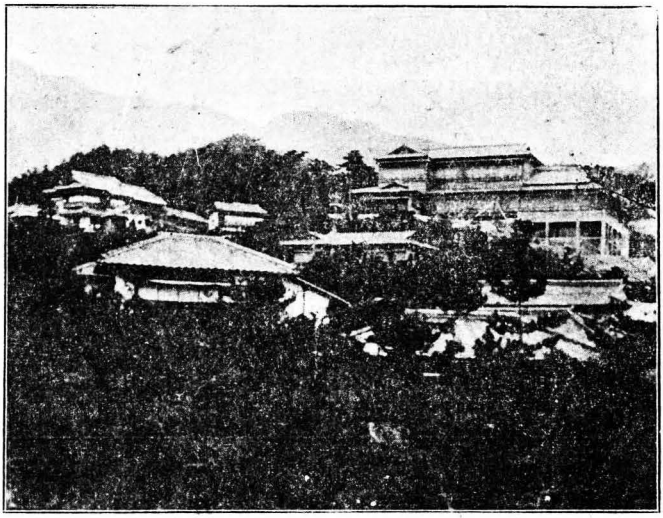
新春の溫泉氣分は

六甲苦樂園

大觀樓
長春樓
松雲館
菊水樓
六甲ホテル

▲阪急夙川、阪神香櫨園から自動車の便があります（十分間）

▲西宮北方



大觀樓には大宴會場の設備があります

六甲苦樂園事務所
電話西宮一〇一番